

## 10. 別科日本語研修課程

### (1) 理念・目的

#### 〔現状の説明〕

別科日本語研修課程（以下別科と略称）は、本学に入学を希望する外国人で、学部・研究科における講義などを理解するに至らない学習者に、日本語、日本事情（日本の文化・社会）、基礎科目（英語・数学）などを習得させるる目的で作られた課程である。限られた短時間で、大学の学習や研究に必要な日本語能力を授けるという使命がある。学習者の個性および能力と、限られた時間とに配慮しながら、多くの知識と学習習得の方法を身につけさせなければならない。

#### 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

別科日本語研修課程は、昭和63年（1988年）4月に開講し、現在16年目を迎えようとしている。当初は非常に入学者が少なかったが、次第にその数を増やしてきている。

別科の修業年限は1年間であるが、正味10か月、33～35週にすぎない。学習時間にする、1000時間に満たない。その短時間内で、日本語能力のまったくない外国人学習者を大学において講義を理解できるまでにその日本語能力を高めることは不可能といってよい。その不可能を可能にしようとして努力をしているのが、別科の目標である。

#### 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

本学には、別科生ばかりでなく、学部にも大学院研究科にも多くの留学生が学んでいる。外国語学部の留学生には、日本語能力を補うための科目を履修することができるが、他学部の留学生は履修できない。これでは、別科から学部まで全学的な留学生対策としては満足できる教育的支援とは言えない。保健学部・社会科学部の留学生にもなんらかの日本語補充支援を行う必要がある。

### (2) 学生の受け入れ

#### 〔現状の説明〕

学生の入学は、4月と9月に行われる。4月に入学した者は、翌年の3月が修了時期となる。9月に入学した者は、翌年の7月に修了する。

日本語の能力別に複数のクラス（平成12年度は3クラス）に分け、日本語・日本事情等の科目を履修させる。入学時の日本語の能力は一定でない。すでに中級の能力をもつ者も、まったく日本語を解さない、いわゆるゼロの状態の学生も入学してくる。

入退学・修了などの事務は国際交流研究所の職員がこれに当たっている。また進学相談や教科学習相談などは、教員・職員が協力してこれに当たる。

別科の事務は、当初は本学学生部がこれに当たっていたが、1997年4月国際交流研究所の発足にともない、国際交流研究所のスタッフがこれに当たることになり、現在に至っている。生活指導面では現在でも、国際交流研究所と本学学生課がその業務を担当している。

## 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

クラス数は、当初は1クラスであったが、次第に入学者数が増加するに伴い、2クラスに増やし、さらに平成12年度から3クラスに増設した。

入学時期は、当初より平成11年までは、4月開講であったが、平成10年度から外国語学部がセメスター制を導入したことにより、別科もセメスター制に変わり、4月開講の春クラス、9月開講の秋クラスができた。9月開講クラスができたことも、入学志願者増加の原因になっている。

学生数確保の手段として、各大学では継続校・系列校（付属高校）などの拡充につとめている。留学生の定員化をはかっている外国語学部では、別科からの進学者を一定数確保すべきであるが、他大学に流れてしまう傾向がみられる。今後は、本学の他学部への進学をはかり、他大学への流出を防ぐ方策を検討することが必要である。

## 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

数多くの質の良い留学生を受け入れるには、本学の各学部や別科の研究・教育体制が常に向上し、国内ばかりでなく、海外においてもその実績が知られるようにならなければならない。協定校を中心に海外各国に、研究・教育実績を知らしめるよう活動を活発化していく必要がある。

留学生の教育には、時間と費用がかかるものである。この点をいかに効果的・能率的に推進するべきかについては、別科の教職員ばかりでなく、全学的な理解と協力を必要とする。現在の業務は、外国語学部内の範囲で行われているが、保健学部、社会科学部などへの入学を推進することと、それら学部の教職員の協力が必要である。

## (3) 教育課程

## 〔現状の説明〕

初級のクラスでは、話し方（口頭表現）、聞き方（聴解）、読み方（読解）、書き方（文章表現）の4技能と文字表記の知識や文法知識を学ぶ。中級クラスでは、上記の4技能と文字表記の知識や文法知識のほかに、社会生活に必要な日本事情（日本文化・社会）や学習活動に必要な大学の講義を聞く技能などを学ぶ。

中級から学習を始めたクラスにおいては、新聞やテレビのニュース、ドラマなどを教材に、日本語、日本社会の諸層の学習、研究のための資料探し、レポート作成の方法、研究の発表方法、日本での生活適応のための学習などを行う。

学部・大学院で学習、研究できる程度までに日本語能力を向上させることを目標とし、日本語聴解8単位、日本語読解8単位、日本語口頭表現8単位、日本語文章表現8単位の計32単位を必修科目にしている。また、選択必修単位として、日本事情（日本の文化・社会）英語、物理、化学のうちから2科目4単位を選択させており、その修了条件は以上の科目の単位をあわせ36単位である。平成13年度より、上記日本語・基礎科目のほかに、情報処理の科目を入れることにした。

## 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

来日した者の中には、全く日本語能力のない未学習者も少なくない。その学習者たちも、

授業開始から 300時間で、通常的生活程度をカバーする程度の日本語会話能力がつき、中級期には8000語程度の語彙も習得してしまう。日本語教育教授細目(シラバス)、日本語教育の指導計画(コースデザイン)などが強化された上に、また、集中教育という「詰め込み授業」が効を奏している。そして、さらに教育における効果的な条件として、学習者の強い動機があり、言語使用国における当該言語学習という環境支援条件が備わっている。

別科では、短期間の集中的教育が行われており、教育効果は抜群である。しかしながら、それだけに学習者の疲労度、ストレスは計り知れず、この問題の解決策を早急に講じる必要があるだろう。

#### 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

大学進学に向けての必要な学習項目の再点検をはじめ、コースの再検討、学生に対しては、質の良いアルバイトを勧めるなど、生活面についても検討して行かなければならない。

### (4) 研究活動

#### 〔現状の説明〕

教員相互の研究活動の場は、一定ではないが、教員(専任、兼任、非常勤)はすべて日本語教育学会に属し、研究活動を続けている。学外から教授法、漢字学習、留学生教育、音声教育などの専門家を講師として招き、学部生とともに討論会、シンポジウム、研究会、勉強会を開催している。

#### 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

別科は、教育に費やされる時間が非常に長いということがあるにもかかわらず、別科教員と国際協力研究科学生が中心となって、月に2回以上の研究会が開催されている。教育の現場にある教員と、それを理論的に極めようとする院生とが互いに協力し合って、研究会を開催している。

#### 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

本学には、多くの協定校があり、そのほとんどの協定校は、「日本語学習の課程」を有している。この点において、海外協定校の視線は、日本語教育のノウハウを有する別科に注がれている。こうした協定校との研究協力を得ることによって、研究活動は更に推進されるであろう。

### (5) 教員組織

#### 〔現状の説明〕

教員は、別科長1名と、当初より1名の日本語専任教員がおり、その他外国語学部日本語学科の専任教員が日本語科目を兼任するほか、非常勤講師数名をもってあてている。基礎科目でも本学の専任教員の兼任と非常勤講師がこれに当たっている。日本語担当教員は、ほとんどが国語学・日本語学の修士号を有し、海外で日本語を教えた経験者あるいは、日本語教育に経験の深い教員である。

## 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

別科では、非常にきめ細かい教育指導が望まれる。しかしながら、非常勤講師に依存するところが大きい。学生数に見合う専任教員数が望まれる。

## 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

上記問題点において指摘したように、適切な予算措置が講じられることが望ましい。

## (6) 施設・設備等

## 〔現状の説明〕

別科の設備としては、特設の建物はないが、外国語学部の校舎の一部を教室として使用している他、LL教室や情報処理教室(コンピュータ室)、図書館などは学部学生と同じ設備を使用している。

教員室には、別科スタッフルームがあり、ここには日本語、日本の文化・社会に関する図書資料、情報機器としてコンピュータやビデオデッキを備えたテレビ機器、スライドプロジェクター、オーバーヘッドプロジェクターなどの機器類も備えられており、常時使用可能な状態である。

教授資料としては、各種日本語教材、日本事情学習のための日本文化・社会に関するビデオ、スライドなどが多く集められている。

## 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

施設・設備については、優れたものを有していると評価できる。コンピュータ教育に関しても「情報処理基礎」を学生に指導しており、学生はパワーポイントを使用して各自作成のプログラムで日本語を学習している。

## 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

将来的には、来日したばかりの別科学生一人ひとりにパソコンを持たせ、家庭学習を課して、日本語学習の効率化を図りたい。

## (7) 学生生活への配慮

## 〔現状の説明〕

八王子駅から比較的遠隔地に校舎があるため、学園の近くの貸アパートの家主とも連絡を取り、学生生活についての配慮を行っている。

アルバイトについても、学習に無理なく行うよう指導し、交通事故の注意や、犯罪に巻き込まれぬような諸注意についても、母語あるいは媒介語を介して注意を促している。

校外活動は、年1回奥多摩の自然を訪ね、地域産業の実態を見学したのち、相模湖クラブハウスにおいて1泊する。ここでも学部生との交歓がある。

## 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

別科には、外国語学部の「人的支援環境」というべきLPプログラムがある。入学期に遅れて来日してきた学生に対しても、この人的支援が適応される。このLPプログラムと

は「ランゲージ・パートナーのプログラム」である。外国語学部の学部学生が、外国人学生の日本語教育の支援を行うシステムである。このLPは、平成12年春学期から「ボランティアの単位」として、学部学生の履修が認められた。空き時間や放課後、キャンパス内などで別科あるいは学部に進学した留学生に対し、チューターとして日本語を指導するものである。

外国人学生は、4月、9月の定められた期日に間に合うよう来日することが義務づけられているが、その国の事情により、パスポート発給事務が非常に遅れることもあり、5月ごろ、あるいは11月ごろになって来日し、受付に現れることも少なくない。別科ではすでに授業を開始しており、遅れた分は教員により補講が行われるが限度がある。この部分を補充するのもLPプログラムである。

#### 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

授業開講期間は、1月末をもって終わるが、2月・3月も授業が行うことができればかなりの学習効果が期待できるはずである。

### (8) 管理・運営

#### 〔現状の説明〕

別科には、運営委員会があり、入学審査、学習の成績、進学のおすすめ、別科の予算などについて検討している。

#### 〔点検・評価〕〔長所と問題点〕

国際交流研究所が、別科の事務を取り扱うが、受け入れの項で述べた通り、非常に少ない人員で、留学生の世話をしなければならない。人的支援が得られれば、多くの学生支援のためのプログラムを実行・実施できるのであるが、現状では意をつくせない。

#### 〔将来の改善・改革に向けた方策〕

別科は、単に外国語学部のためにあるのではなく、日本語能力に欠ける各学部の留学生全てを扱えるようなシステムの構築を目指すべきである。そのためには関係学部との緊密な連携により、より密度の濃い教育が行わなければならない。別科の運営には、外国語学部にかぎらず、各学部からの運営委員の参加が望まれる。